

# 「生きる力」を育む園内研修について

—上田女子短期大学附属幼稚園を例として—

菱 田 隆 昭  
佐 藤 利佳子

キーワード 生きる力 園内研修 幼稚園教育要領 幼稚園教諭の資質向上  
人数集めゲーム

## はじめに

本格的な少子化社会の到来と共に、近年の核家族化、都市化、国際化、情報化といった社会の変化を背景として、幼保一元化や公設民営化、構造改革特区の動きなど幼稚園を取り巻く環境は大きく変化している。また、これらの変化が保護者や地域社会の幼稚園に対するニーズの多様化をもたらし、従来にもまして各幼稚園は特色ある教育活動を展開していくことが求められているのである<sup>1)</sup>。

それに伴い、幼児と直接かかわる幼稚園教諭も、幼児一人ひとりを理解し、総合的な指導をするための資質と、新たな社会変化に対応するための幅広い生活体験及び社会体験を背景にした柔軟性やたくましさを基礎として向上させる資質が求められるようになった<sup>2)</sup>。その資質は、多岐にわたり、ライフステージに応じて、不断の向上に努めることが必要であり<sup>3)</sup>、教師の積極的かつ学び続ける姿勢によって得ることが可能と考える。幼稚園教諭として求められている資質を様々な研修や通常の保育活動を通して、自ら向上させていくことが重要となるであろう。

また、幼稚園では「生きる力」の基礎を培うため、幼児の主体的活動を促進する遊びを通じた総合的な指導を行うことが重要とされている。また、生きる力については、「いかに社会が変化しようと、自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力」、「自らを律しつつ、他人と共に協調し、他人を思いやる心や感動する心など、豊かな人間性」、「たくましく生

きるための健康や体力」を重要な要素としてあげている<sup>(4)</sup>。幼稚園教育の基本が、環境を通して行うものであり、幼稚園教諭が幼児の人的環境であることは、教師自らが幼稚園教諭としての資質向上を図る姿勢が、「生きる力」の基礎を培う教育活動となるであろう。そして、幼稚園は、教師が主体的に資質の向上に取り組めるよう研修の機会や処遇等も含めて総合的に条件整備を行う必要がある<sup>(5)</sup>。また、教諭の資質向上に取り組む過程や成果を、自己点検・評価の一部として、出来る限り公表していくことが、保護者や地域の多様なニーズに応え、幼稚園教育の水準を維持向上させると共に特色ある幼稚園教育に資することになるろう。

私たちは、このような目的意識のもと、日々の教育実践に極めて密接な園内研修において、「生きる力を育てる」を視点として、具体的な実践を検討することで、園内の共通理解と協力体制の構築及び教師の資質向上の可能性を探ることとする。そのため、「生きる力」の育成を研究テーマに掲げる上田女子短期大学附属幼稚園の園内研修を例とし、①保育実践及び研修において、教師の中に「生きる力」の育成がどのように意識化されているか、②若い教師の成長過程に、「生きる力」の育成がどのようにかかわっているかを考察したい。本稿では、平成16年度の附属幼稚園の概況及び研究保育を通して、①の分析をすすめることとする。

## 1. 上田女子短期大学附属幼稚園の概要

### (1) 上田女子短期大学附属幼稚園の教育方針

上田女子短期大学附属幼稚園は、1978（昭和53）年の開園以来、「子どもを一人の人間として尊重し、その独自性、固有性を大切にして、発達援助の実践をめざす」教育方針のもと、次のような教育目標をかかげている<sup>(6)</sup>。

①生き生きしている子ども……………毎日をのびのび積極的に生き、生命の躍動している子ども

②健康な子ども……………心もからだも強い、自立する心、耐える力をもって独り立ちする子ども。

③心の豊かな子ども……………自然や他者への思いやり、協力する心を育て、社会の中で共に生きる子ども。

教員は、園児が以上の教育目標を達成するために必要な体験を豊富に得られるよう環境を構成している。子どもとの日々のふれあいの中では、「かけがえのない毎日が充実しているか」「今、子どもたちは何を必要としているか」に目をむけ、耳を傾けると共に、教師全員で考え合いながら子どもたちと向き合う保育をこころがけている。

## (2) 教職員構成

本園の教職員構成は、園長、副園長、教諭7名、園務職員2名である。副園長以下、本年度は、新任教諭をふくめ20代4名、30代1名、40代3名と比較的幅広い年代の教師体制となっている。教師の平均年齢は33.4歳、平均経験年数は11年である<sup>(7)</sup>。

教育活動においては、経験年数の多い教師と若い教師がコンビを組み、学年運営をしていく方法をとっている。若い教師の独自性を阻むことなく、先輩教師の保育に対する姿勢を身近に学ぶことができるように配慮している。先輩教師は、気になることがあると、すぐに声を掛けアドバイスをする。保育は多様であり、その時その場面での活動から学ぶことが多い。瞬時のアドバイスが、若い教師の子どもの見方を深め、保育を円滑に進めていくきっかけとなっている。その際、先輩教師は、的確かつ育成の視点の有無が、教師相互の刺激し合える関係形成を左右するという意識を持ち、実践に心がけている。また若い先生に対する保護者の不安にも、対応していける体制ではないかと考えている。

## (3) 子どもの姿

今年度の園児数は、男子85名、女子98名の計183名でのスタートであった。子どもたちの通園区域は広く、園バスと保護者による送迎の比率は、ほぼ半々である。家族構成では、祖父母との同居は約三分の一である。また第一子89名、第二子67名、第三子以降27名の割合である。

子どもたちは、比較的素直であり、人懐っこく活動的な子どもが多いように思う。遊びの様子では、男女の別なく誘いあって集団遊び（おにごっこ、リレー、色鬼等）をする姿が見られる。友だちと仲良く遊び刺激しあう反面、自分の思いや考えをだせず発言力の強い子のいいなりになってしまう子、自己不安から何が何でも自分の周りに友だちをおいておこうとする子どもの姿もある。紙や空き箱を使い自分なりに工夫して製作に熱中したり、裏山での遊びを通して、自然と関わり、様々ことを試しながら

成長していく姿がある。

## 2. 平成16年度研究テーマ「生きる力を育てる」と研修状況

### (1) テーマ設定

平成13年全日私立幼稚園連合東海北陸大会にて「生きる力とは」という内容での発表園に指定され、近年そのテーマに沿って子どもたちをみつめてきた。そして、「生きる力」とは、子どもが自ら課題を見つけ、主体的に考え、問題を解決していこうとする力の芽生えではないかとした<sup>(8)</sup>。また、それは子どもたちが日々健康で、生き生きした生活の中で、豊かな心が育ち、命あるものの喜び感じる時に培われると考えた。

本年度は、『生きる力を育てる』視点にたち、子どもたちの発達課題を見通しながら、子どもとの関わりを考え、自らを高めていく」といった研究テーマを設定した。特に、園生活における子どもたちの様子から、以下の3点を「生きる力の育ち」と捉えることとした<sup>(9)</sup>。

①生活が安定し、心が安定してくると、子どもは自ら動き出す力を発揮する。

②興味のあることは、自ら広げたり深めたりする。

③友だちと一緒にいることの楽しさを感じ、自分の思いを大切にしながら、友だちの思いに気づき育ちあっていく。

幼児は、この時期、家庭における生活から、より広い世界に目を向け初め、依存から自立に向かう。その育成には、幼児にとって、魅力的な生活の場や物、友だちとの関わりが大切になるが、教師の存在や適切な援助が必要不可欠である。そのため、幼児を取り巻く環境、社会の目まぐるしい変化を見据えながら、「子どもたちは今何を望んでいるのか」や「今どうする事が必要なのか」、「子どもたちの思いを感じ取れているか」といった「幼児の今」を考えていかななくてはならない。そして、幼児との関わりを見直しながら教師自身の力量を高める必要性を強く感じる。

### (2) 研究の進め方

具体的な研究の進め方は、日々の保育実践の記録を基に以下の4点から振り返り、これからのあり方を話し合うことで、共通理解とともに教師の力量形成を図ることとした。

- ①子どもたちの遊んでいる姿を追い、そこから子どもたちの思いや育とうとしているものを探る。
- ②子どもたちの欲している物は何かを考え、場や用具等の環境設定を心がける。
- ③集団の遊びを大切にしながら、その中での一人一人を見とり、どうとりあげて生かしていくか考える。
- ④教師間の話し合いを密にして、意識を統一しながら連携を大切にする。

### (3) 研修のあり方

教師の資質向上を図る為に、園内研修を充実させることは大切なことである。また、幼稚園教育要領では、幼稚園の教職員全員で一人ひとりの園児を育てる視点に立つことが強調され、共通理解と協力体制を築き、教師としての専門性を高めるための園内研修が求められている<sup>10)</sup>。しかし、幼稚園での研修は、少人数の教員で構成されている身近な人間同士で行われることから、形式化し、成果の深まりが期待しにくいという課題がある。日々の保育や行事等におわれ時間内に研究会の時間を設定しにくいこともある。そのため、教師が負担増に感じ、「やらされている」という意識をもってしまうことがある。また、少人数のため、形式化されてしまい発言しにくいことや話し合いの方向性が同じになりやすいことがあげられる。

そこで本園では、堅苦しくなく、ざっくばらんに話し合える雰囲気づくりを大切にするため、具体的な話し合いを多くしている。毎週月曜日を保育研究会の日と定め、短時間でも回数を多く持つことで、本音の話し合いができるよう心がけている。また、話し合いの司会を月ごとに順番におこない、研修に対する意識、責任感を高める工夫をしている。

### (4) 園内研修

#### ① 保育研究会

原則として毎週月曜日に40～50分位の短時間でおこなうようにしている。この会では、より実践に即した事例を基に、園生活での約束の確認や行事内容作り、気になる幼児の姿、幼児の見取り、クラス運営、活動のみかえし等のテーマを決めて話し合い、多様な考えを知ることで自己の実践にいかしていくことをねらいとしている。時には、積極的に自分のクラスの状況を他の教師に訴え、アドバイスを求める教師もでて

(事例 1) 7月21日・22日 年中クラス 昼食後の昼寝準備の前

A 男 の 姿	まわりの子の様子	教 師 の 関 わ り
<p>(21日)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• お弁当の後片付けを済ますとすぐに自由画帳とクレヨンを出し、空きページを出す。</li> <li>• クレヨンでグルグルと円を描きはじめる。</li> <li>• 違うクレヨンを取り出し又グルグルと重ねて円を描く。</li> <li>• 背中を丸め廻りの様子も全く目に入らない感じで、次々と色を変えながらグルグルと円を描き続ける。</li> <li>• 教師が覗き込んでいるのにも気付かず肩をたたかれ、手をとめて顔をあげる。</li> <li>• 教師の手元をじっと見詰める。</li> <li>• ワッとひきつけられたようで、「僕にも貸して」と言い楊枝をうけとると、塗りこんだ円の上をグルグルと引っかき始める。画面の下から新しい色が浮き上がってくるのを嬉しそうに見ながら描き続ける。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 食べ終わった子から各自、自由画帳を広げ絵を描いている。</li> <li>• B男、C男、E男がA男のまわりで描きはじめる。</li> <li>• A男がすごい勢いで描いているのにつられるように、B男もグルグル描き出す。</li> <li>• 廻りに集まってきた子たちも真似をしてグルグル描き始める。</li> <li>• みんなでA男の自由画帳を覗き込む。</li> <li>• うらやましそうにしていたが次々楊枝をもらい、引っかき絵をはじめる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 片付けたら絵を描いているように声をかける。</li> <li>• A男の熱中している姿を遠くから見守るようにする。</li> <li>• A男の熱心さにひかれて側に行つてのぞきこむ。(ずい分塗りこんでいる。下が明るい色で段々濃い色になっている。楊枝で引掻き絵にしたらどうだろ)</li> <li>• 楊枝を取り出しA男に「見てて」と声を掛け、塗りこんだ円の端っこに線をひいてみる。</li> <li>• 先がとがっていることに気をつけるように言いながら、子どもたちの様子に目を向ける。</li> </ul>
<p>(22日)</p> <p>昨日と同様グルグル色を塗り、楊枝で引っ掻き絵をして楽しんでいる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 尋ねられると「はじめはグルグルって描いて、また違う色を塗って、それで先生から(楊枝)もらって描くの。」と一つ一つ丁寧に説明している。</li> <li>• (楊枝)家がないから持って帰りたい。家でもやりたい。今までとは違う配色にして塗りこみ引っ掻き絵をして楽しんでいる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 昨日は知らないでいた子たちが「どうやるの?」「それどこにあるの?」と尋ねながらA男の様子をうらやましそうに見ている。A男の説明を熱心に聞き、教えられたとおりにやってみる。途中でA男に確認しながらやっている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 楊枝をほしがる子には渡し、やり方を尋ねる子には「A男くんに聞いてみたら。」と声を掛けA男の様子を見守る。</li> <li>• 側で見ながら特別には声をかけなかった。</li> </ul>

きている。教師が、幼児の姿の事例を持ち寄り、それを教師全員で見合いながら、話し合う時間を何回か持ち、率直に意見や感想を出し合っている。

事例1は、2004年7月保育研究会において、年中クラスの担任から出されたA男とまわりの幼児の様子についての記録である。この事例に対し、他の教師からは、

- ・普段のA男の様子からなかなか想像しにくい情景だった。
  - ・A男に対して普段あまりいい感情をもっていなかった子たちにとって、今回のように熱中し、穏やかに人とかかわっているA男の姿は新たな発見だったのではないか。
  - ・教師は今回意図的に声かけ等をすくなくしたのか。また、ポイントになる場面はなかっただろうか。
  - ・教師は、「きれいな色だね。」と声にだして共感してあげたらよかった。
  - ・この後A男が熱中できるような活動は考えられないか。彼の得意なものを取りあげていくことが必要ではないか。
  - ・クラス全体にかかわっていくような活動になっていくともっとよいのではないか。
- といった意見がだされた。

普段は非常に落ち着きがなく、熱中して物事にとりくむことが少ないA男である。短時間ではあるが、こんなに熱中できたのは大好きな自由画帳とクレヨンだったからであろう。A男は、教えられたわけでもないのに、明るい色から濃い色へと美しい色を重ねて塗っている。偶然の行為から新しい遊び、楽しみを見つけエネルギーを発散していくことができた。まわりの友だちとも穏やかに、和やかな雰囲気の中で教えあう姿が見られた。A男にとってこのような心地よい時間や空間がとても大切と思われる。このように短時間でも、ひとつの事例に対し皆で考える時間を大切にしている。

## ② 研究保育

本園では、年一回外部から講師を招き、教師の代表者が保育をし、それを全教師で参観した後、研究会を行なっている（次章を参照のこと）。その成果を、毎年冊子にまとめている。

### (5) 園外研修

#### ① 研究委員会

東信地区私立幼稚園協会主催の研修であり、東信地区の幼稚園から各一名ずつ代表が集まり研究をすすめていくものである。毎年テーマを決め月約一回のペースで集まり行われる。そこでの研究成果は、長野県幼稚園教育研究大会において発表される。本園からも代表が参加し、保育研究会で研究委員会の報告または内容を討議することで、教師全員の意識を高める努力をしている。他園の教師との意見交流あるいは共同研究は、数少ない経験であるばかりでなく、見解の相違があり難しい反面、新たな気付きの場になる貴重な機会となっている。

## ② 各種研修会への参加

長野県内の幼稚園は、夏休みが約3週間である。保育所保育が主流の地域であり、それに合わせて幼稚園も短くせざるをえない面がある。夏期休暇中は研修のよい機会となるが、遠方で開催される研究会・学会には参加しづらいのである。そのため、近隣で行われる研修への参加が主となるが、出来る限り積極的に参加している。本年度は、県私立幼稚園協会主催の研修会に6回、東信地区私立幼稚園協会主催の研修会に2回、上田市幼年教育研究会主催の研修会に2回、上田市他主催の講演会、上田女子短期大学児童文化研究所研究大会に参加している。研修会参加後、保育研究会で研修報告をおこない、その内容について皆で意見をだしあいより内容を深めるようにしている。

## 3. 平成16年度研究保育「人数集めゲームをしよう」

### (1) 「人数集めゲームをしよう」の概況と経過

本年度の研究保育は、平成16年11月25日(木)に、年中ばら2組(男子17名、女子16名の計33名)において、クラス担任の丸山陽子教諭が行った。担任教諭は、保育歴6年目であるが、このクラスの担任は今年度からである。また、外部講師は、元長野県幼児教育専門員の丸山昭子氏である。同氏は、本年度から上田女子短期大学非常勤講師として、「環境の指導法」を担当している。

ばら2組の実態であるが、本年度担任は学級経営の願いとして、以下の2点をあげ、保育に取り組んでいった。

#### ① 遊びや生活の中で、好きなことや、やりたいことを見つけて「こうしたい」も



しくは「こうやって遊びたい」と意欲をもってほしい。

- ② 友達と一緒に遊び、かかわりの中で、自分の気持ちを伝えたり、友達の姿に気づき、共に生活する楽しさを実感してほしい。

また、学級の様子・遊びの姿から、担任は幼児の近況を以下のように把握していた。

10月の運動会を経て、体力的にも精神的にも成長が感じられる。外遊びが活発になり、縄跳び、登り棒、鉄棒、リレー等友だちと誘い合い、時には競い合って楽しむ姿がよくみられる。遊びの中で互いにアイデアを出し合い、工夫して遊ぶことも増えたように思う。しかし、友だちとの関わりが、いつも仲の良い子同士に片寄っているように感じる。仲の良い友だちといることで安定できることは良いことではあるが、「〇〇ちゃんと一緒じゃないとだめ」とこだわりすぎてしまったり、仲の良い友だちの中での力関係、上下関係のようなものも目につくようになる。

そこで、11月になると、担任は①関わりの少ない友だちに目を向け、その友だちの良さに気付いていくこと、②様々な友だちと関わる中で、遊びを発展させ興味を広げていくこと、を重点的に取り上げ指導していく必要性を感じていた。また、これらをおさえた保育の展開が、「生きる力を育てる」ことにつながると認識し、継続的に幾つかの活動をおこなった。

①椅子とりゲーム・花いちもんめ・かごめかごめ等の集団遊び

②グループでの当番活動

③2人組・3人組等でおこなう手合わせやゲーム

④人数集めゲーム等で集まった人数で遊ぶ活動

このような活動を通し、教師が意図的に働きかけたことは、幼児が友だちに自分の考えを伝えたり、相手の話を聞くといった姿勢の大切さを伝えること、遊びの中で困った場面につづかった時、どうしたら自分たちで解決できるのかを投げかけ考えさせること、遊びの中に一緒にはいって楽しさを共有することであった。

しばらくすると、友だちのところへ行ってみてアイデアを伝えたり、どうするのといったやり取りをしながら、遊ぶ幼児の姿が散見できた。さらに、担任はいつもの仲良しグループの枠を取り払い、共通の目的を持って、一緒に遊ぶ一体感を進展させるには、「人数集めゲーム」の活動が有効ではないかと考えた。

11月25日(木) 主活動の保育案		ばら2組 4歳児 33名	丸山 陽子
保育材 人数集めゲームをしよう ねがい 先生の笛の合図や言葉を良く聞いて、素早く動いたり友だちと集まることを楽しんでほしい。			
時刻	予想される子どもの動き	援助と配慮	環境構成と準備
導入	① 友だちと集まって集まる。 ・ 楽しみだね ・ ○○君一緒になろう ・ 仲のよい子と2人組みになる子 ・ ゲームだって 楽しそう ・ 早くやろうよ	① 今日はいろいろな友だち集まるよ。 ・ 音楽がとまったら笛の音を聞いて集まるように伝え一回やってみる。 ・ 子どもたちが広がったら笛を二回吹く。 ・ 今遊んだのは人数集めゲームって言うんだよ。今日はこのゲームをして遊ぼう。	遊戯室でステージの方を向いて座らせる
展開	① 何人であつまるかな？ ・ 笛何回かな？ ・ あっ 3人だ ・ 誰と組めばいいかな ・ 仲のいい子と組みたいと、友だちを選ぶだろう ・ 次は何人？  ② 違う友だちと集まろう ・ ・ 次はどうやるの ・ 違う人と一緒だって ・ どうしよう…… ・ 1. 2. 3……一人足りない ・ ○○君あっちへ行って ・ 人数が上手く集まらないだろう ・ 人数を数え、どうするか考えあうだろう ・ 違うグループから「こうすればいいよ」と声をかける子がいるだろう	① 人数集めゲームをしよう。 ・ いろいろな人数でテンポよくやる。 3人→4人→5人 ・ 子どもたちがどうやって集まってくるか近くに行き見ていく。 ・ 割り切れない人数のときは、保育者が仲間に入っていきようにする。 ・ 笛を吹く早さに変化をつけゲームが盛り上がり、集中して楽しめる雰囲気を作る。  ② 今と違う友だちと集まっていこうよ。 ・ 笛で人数を伝える。 2人→3人→4人 ・ 集まったら座って数えよう ・ こどもたちの集まり方を見ていく ・ 人数が集まらないときの子どもたちのやりとりを見ていく ・ 人数が集まっていないところには「どうしたらいいかな？」と声をかけ、子どもたちから出てきた考えを取り入れながら一緒に考えていきたい ・ それでも人数が集まらない時は周りの子たちと一緒に考えていきたい	トップパネル、プレークッション等の大きな遊具はステージ上に片付けておく。

	<p>③ 10秒で集まろう</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 秒数を知り、慌てる子がいる</li> <li>・ 早く早く……</li> <li>・ どうしよう 10秒……</li> <li>・ ドキドキするよ</li> <li>・ よかった 集まったよ</li> <li>・ あと3秒</li> </ul> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ アウトになりたくないよ</li> <li>・ 集まった子同士 ホットする子喜ぶ子</li> <li>・ 友だちと集まれなくて、がっかりする子がいる</li> <li>・ アウトになっちゃった</li> <li>・ 次 頑張ろう</li> <li>・ 3人集った</li> <li>・ ドキドキしたね</li> </ul> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ よし最後に友だちと一緒に集ろうと力が入る子がいる</li> <li>・ 3人集った</li> <li>・ ドキドキしたね</li> </ul>	<p>③ 今度は10秒で集まって見よう</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 先生が10秒数えるからその間に集まろう</li> <li>・ 先生の声をよく聞いて動こう</li> <li>・ 最初はゆっくり10秒数え、慣れてけるように二回おこなう</li> <li>・ 10秒で集まれなかった子たちも、人数を集められるようにする</li> <li>・ 今度は10秒であつまれなかったらアウトだよ。子どもたちが緊張感をもてるようにテンポや話し方も気をつけていく</li> <li>・ 段々慣れてきたら、秒数を減らしスリルを出していく</li> <li>・ 次は何秒であつまれるかな 8秒→6秒</li> <li>・ アウトになった子には励まし次に頑張るように伝える</li> <li>・ 集まれた子たちの喜びを共感する</li> <li>・ 最後のゲームをすることを伝える</li> <li>・ 10秒で3人が集れるよう笛を吹く</li> <li>・ 子どもたちがどう動き集るかを見ていきたい</li> </ul>	<p>子どもたちの様子を見ながら、窓を開けるなどして換気に気をつける。</p>
<p>終末</p>	<p>① ○○君たちと集って座ろう</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 今日○秒って言われてドキドキした</li> <li>・ 人数が足りなくて困った</li> <li>・ おもしろかった</li> <li>・ もっとやりたいな</li> <li>・ またやろう</li> <li>・ 何がいいかな</li> <li>・ おもしろいやり方を考えるぞ</li> </ul>	<p>① 後のゲームで一緒になった友だちで座るよう言う</p> <p>人数集めをして遊んでどうだったかな？</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ ○○君人数があつまらない時、友だちを誘ったり、集めようと考えていたね</li> <li>・ 友だちと集った時の気持ちも聞いていきたい</li> <li>・ 次回はどのような人数集めゲームをしたいかを問いかけ、次時への期待をもたせる。</li> </ul>	

11月12日には、「たまたま一緒になった友だちとともに、様々な遊びをして考えたり楽しんだりしてほしい」といった願いのもと、複数のグループをつくり、①名前の紹介、②船こぎ、③かごめかごめ等を行った。まだまだ仲の良い友だちを選ぶ姿が多い。また、自分の言いたいことを十分に伝えられない子どもの姿がみられた。

11月17日には、「次々とペアやグループをすることにより、さまざまな友だちとかかわってほしい」といった願いのもと、次々と人数を変えてグループづくりを行った。その際、二人組みの時は男女ペアになること、複数人数の時は男女混合グループになることを、約束事とした。初めのうちは仲の良い子にこだわっていた幼児が、徐々に様々な友だちと組むようになる。また、条件にこだわるあまり、ペアを組めない子もでてきた。これらの経過を踏まえて、「人数集めゲーム」の研究保育をすることになった。

## (2) 「人数集めゲームをしよう」の保育案

「人数集めゲームをしよう」の保育案は、前ページの通りである。担任は、少しずつ段階をつけていくことによって、幼児が次はこうしようと自ら工夫をしていくのではないかと考えた。つまり、人数集めゲームを通じて、幼児が自ら課題を見つけることで、「生きる力」を育むことが可能であるということを企図していたのである。また、幼児が困ったこと、今度はこうしたいという思いをしっかりと話すことのできる場面作り、教師の聞く姿勢が大切となろう。

## (3) 研究会における教師の意見

研究保育後の研究会では、子どもたちの動きをおいながら活発な話し合いがされた。

教師A(40代)は、一人で走り回り最後までなかなか手をつなごうとしなかった子について取り上げ、この子の思いや他の子との関係、担任のかかわりについて言及した。

教師B(20代)は、一人の子を意識しながらゲームに参加していた女の子が、先生からだされた条件に困ってしまった様子。その後 違う子と組んだ後積極的になっていき、自分から回りの子に声をかけられるようになっていった変化を指摘した。

教師C(40代)は、はじめはそれほど積極的に周りとかかわっていないように見えた女の子が、10秒という条件をだされてから必死になっていった様子と自分から組んでいこうとする気持ちの変化について言及した。

教師D（30代）は、昨年より成長を感じる女の子について、聞く姿勢やゲームにかかわる姿勢、条件の変化を確実に自分の物として楽しんだ様子を指摘した。その子に対する教師のかかわりにも言及した。

また、一人の教師の発言に対して、いろいろな角度から意見が出され話し合いがなされた。そうするなかで、次のような課題が見えてきた。

- ・女の子の中でのグループが固定化してしまっている。
- ・なぜ違う人とやらなくてはいけないか、子どもたちがわかっているか。納得できていたのだろうか？子どもたちが納得していけるようにすることが必要だ。
- ・仲良しの意義、組んでいる意義とはなにか。子どもたちも担任もはっきりと自分の中に持てるようにしなくてはいけない。
- ・困らせる、困難な場面を意図的に作ることが大切。そこからどうしていくか子どもたち自らに考える場となり、生きる力へとつながっていけるはず。
- ・遊びの場面で、同じパターンの繰り返しになってはいけない。
- ・言葉の概念で子どもたちにつたえようとしてもだめではないか。
- ・活動の時間の中で、ていねいにおさえる箇所が一箇所は必要ではないか。

また、講師の丸山昭子氏からは、以下のような指導を受けた。

- ・男女混ざって遊べる活動の時間を意識的につくる。教師の中から男の子・女の子という意識をとってしまう。
- ・競技になると、その子の本能がでてくる。つまり人間性をださせることも大切になる。
- ・「生きる力」＝「人間関係」と捉えることもできる。思いを伝え、聞いてあげることが大切である。先生と子どもだけでなく、友だち同士の中でも重要なこと。
- ・子ども同士をどうかかわらせていくか、という教師の見通しや見取りの設定が大切になってくる。
- ・教師の出と待ちの部分をしっかり区別していく。困難な場面に教師があわてて手をだす必要はない。教師は、その子や周りの子をいかに援助してあげるかということを中心に考えていけるようにする。

今後の課題として、下記のような点があげられる。

- ① 子どもの姿や活動の記録を取り、分析することはできてきたように思われる。そ

れをより保育に生かしていけるように、教師各自の意識や自覚を高めていく。

- ② 日々の保育の場で常に見ていく視点の意識化が弱い。研究テーマの視点もより明確にする必要がある。

## おわりに

附属幼稚園は、上田女子短期大学幼児教育学科の実習園として、1年生の観察実習や部分実習、2年生の参加実習等、ほぼ1年を通して多数の実習生を受け入れ、教師がその実習指導を担当することになる。つまり、教師は恒常的な実習生の指導を通し、自己の資質向上への動機付けは充分過ぎるほどであり、それ自体が一種の研修の役割も果たしているのである。しかし、そのために物理的な時間の制限を余儀なくされるという現実もあり、幼稚園教諭として求められる資質向上には、その動機づけを自己の力量形成へ発展するため、他園にまして園内研修の必要性と役割が重要となるであろう。

毎週行われている保育研究会は、実践記録をもとに短時間でも一定の成果をあげている。その成果をさらに、通常の保育活動や園運営のなかで、各教師が意識し、活用させることが今後の課題となる。16年度研究保育の実践に対する課題において、附属幼稚園が設定した3つの「生きる力の育ち」を意識した意見は、全体的に少なく、特に生活の安定・心の安定が子どもの自発性を喚起するという視点から幼児の実態を捉えることが稀薄であるように思われる。毎週行われる保育研究会における実践の分析や意見交換の際に、「生きる力」を育てる具体化という視点を、教師間に意識化・共有化できる進行等の工夫が必要となろう。例えば、7月保育研究会でのA男の事例でも、心の安定の大切さが語られているが、そこに「生きる力」の育ちの視点を加えることが望まれるのである。その蓄積が、感覚的な意見やアドバイスを脱し、世代間のギャップやキャリアの違いを超えて、他の教師による保育実践や実践記録等の課題を自己のものとしていく可能性を高めるであろう。

今後は、研修と通常の保育活動、園内研修と園外研修など、それぞれの機能や位置付けを明確にし、それぞれの機能を組み合わせることが望まれる。その際、「生きる力」という視点は有効であろうし、養成校としての大学との連携のもと、養成教育と

現職教育の結合による幼稚園教諭の資質向上の可能性を探りたい。

注

- (1) 「教師の資質や能力の向上につながる構内研修の在り方」(文部科学省『初等教育資料』773、2003.10、32頁)。
- (2) 「幼稚園教員の資質向上について—自ら学ぶ幼稚園教員のために—」(幼稚園教員の資質向上に関する調査研究協力者会議報告書、座長無藤隆、2002.6、以下「教員の資質向上報告書」とする)。「I-1 幼稚園教員の資質向上の意義」。
- (3) 同上。
- (4) 文部省『幼稚園教育要領解説』フレーベル館、1999、2頁。
- (5) 「教員の資質向上報告書」前掲。
- (6) 上田女子短期大学附属幼稚園編「平成16年度幼稚園要覧」2004、1～2頁。
- (7) 私立幼稚園は30歳未満の教諭が67%を占め、平均勤務年数も8年と短いのが特徴である(URL//ten.tokyo-shoseki.co.jp)。附属幼稚園は、比較的教員構成がバランスよく、4名が子育て経験者でもある。
- (8) 「生きる力」は、「自分で課題を見付け、自ら学び自ら考える力、正義感や倫理観等の豊かな人間性、健康や体力」(文部省編『中央教育審議会答申』ぎょうせい、1998、22頁)とされているが、幼児の実態を鑑み、その芽生えとした。
- (9) 上田女子短期大学附属幼稚園編「16年度の保育を振り返って—子どもとともに—」、2004年、1頁。
- (10) 『幼稚園教育要領解説』前掲、43～44頁。

本稿執筆にあたり、上田女子短期大学附属幼稚園兎束淑美園長はじめ教職員の皆様の多大なるご協力に感謝申し上げます。

本稿は、平成16年度上田女子短期大学児童文化研究所助成費研究の一部である。

菱田 隆昭 (ひしだ たかあき・上田女子短期大学助教授)

佐藤利佳子 (さとう りかこ・上田女子短期大学附属幼稚園副園長)